

小川政弘作 テーマ「生きがいについて」② 「生きてたってなんになる？」

- ナレーション 新井直子は、まあ一般的に“ツツパリ”と呼ばれる存在でした。長いスカートに、パーマのかかった赤い髪、イヤでも目立つ生徒でした。家にもまっすぐには帰らない日が多く、数人の男友達と夜の街をうろついています。
- 新井直子 は一い、^{あきら}暁、元気だった？
- 暁 お、直子、久しぶりじゃん。
- 直子 へへ、今日、ゲルピンなのよ。おごって。
- 暁 オーケー。あそこのディスコ行こうぜ。
- ナレーション 彼女が突っ張っている理由？ そんなもの、別にありません。親は適当にお金をくれるし、友達も適当にいるし、彼女流に言えば、「人生をエンジョイしている」のだそうです。
- 直子 そうなの。家にいたってつままないし、ふざけたり、踊ったり、飲んだりしてる時が一番楽しい。ほかに何もすることがないって言えば、ウソになるな。親の望む大学に行こうと思ったら、人並みの勉強もしなきゃならないし、バスケットだって、ピアノだって、その気になってやろうと思ったら、一日何時間あったって足りないと思うわ。あのころは、あんなに夢中になって汗流してたんだもの。
- どうしたんだろ？ いつから こんなになっちゃったのかしら？ そう、分かってるの、本当は。あの時、あの事があってからよ——。
- 音楽 (ブリッジ)
- 効果音 (バスケットの練習風景)
- 浩二 ちょっと！ 新井君、もっとヒジを伸ばして！ いいかい、何度言ったら分かるんだ？ ボールをパスするときは、「相手をよく見て構えてから、瞬間的に押し出せ」って言ったろ？
- 直子 はい、すみません。
- 浩二 ボクシングでいうストレートだ。もたもたしてちゃダメだぞ。じゃもう一度、バックパスから！
- 直子 はい！
- ナレーション 直子は、中学時代からバスケット部で活躍し、高校に入ってから、バスケット一筋に若い情熱を傾けていました。彼女にとって、ボールと共に駆け巡っている時が、“生きがい”だったのです。そして高校2年の時、先輩の石井浩二がコーチをするようになってから、彼女のバスケットにかける情熱は、更に燃え上がりました。
- 晴美 直子、このごろ楽しそうね。まるでバスケットのために生きてるみたい。もっとも、楽しいのはそのせいだけじゃなさそうね。あんたの生きがいは、バスケットと石井さん。どう、図星でしょ？
- 直子 ウソ。そんなのウソよ。
- 晴美 ダメダメ、隠してもちゃーんと顔に書いてある。
- 直子 ウン、晴美ったら！
- ナレーション そう、いつしか直子は、石井に愛を感じ始めていたのです。石井に喜ばれるように練習に励み、終わった後の意志とのデートを楽しみに、苦しい練習に耐える。——今や彼女にとっては、バスケットと石井への愛が一つになって、生きる支えのすべてとなっていたのです。ところがある日——。

効果音 (開き戸の開く音)

石井 晴美ちゃん。

晴美 あ、石井さん。ダメよ、こんなとこ入ってきちゃ。直子来るわよ。

石井 構やしないよ。ベタベタしていい加減イヤになってんだ、あいつのこと。おれの好きなのは、晴美ちゃん、君だよ。な、いいだろ。(晴美の唇を奪おうとする)

晴美 あ、ダメ、ダメよ、石井さん。

直子 (入ってきて目撃し)や、やめて！

ナレーション 見てはならないものを見てしまった直子は、逃げるようにその場を走り去りました。その時、彼女の心の中の大切なものが、音を立てて崩れ去ったのでした。

効果音 (ブリッジ 回想終わり)

直子(モノローグ)(エコー)——あの時から、何もかも変わってしまったな。結局、なんで生きてんのよ？ 楽しいのは、何やっても夢中になってるつかの間だけ。そのあとの、怖いくらいのむなしさ。これは苦痛だわ。生きててもしょうがないような毎日を、死ぬのもイヤだから、じっと耐えて生きていく…。イヤ！ 絶対イヤ、そんなの。

だけど、こんな風に生きてて、なんになるの？ 生きることの意味って、本当になんなの?!

<続>